

優秀賞

「おいしさ」を共に味わう

大西 玲奈

わが家は3人家族、食べることが好きな家庭だ。夫は揚げ物料理も刺身の盛り付けも得意とする料理家のように、美味しいものを食べることに食欲だ。4歳になる息子は、保育所で毎日給食をお代わりするので、先生にフルコースお代わり組と呼ばれている（もう一人仲間がいるらしい）。魚メニューの日には、魚が苦手な食べられないお友だちたちに「すごーい」と称賛の声を浴びて得意気にさらに食べるという。だがすごく食べるからといって、食べ過ぎて肥満に悩むわけでもない。

さて妻で母の私は、激辛とか異国の味とか、挑戦的な料理には距離をおいてしまうが、和洋中、だいたいどこに行ってもどんな料理でも美味しくいただける。例えば、初めて夫の祖父母宅に遊びに行った時のこと、昼食にごちそうになった天ぷらざるそばをペロリと平らげ、おばあちゃんに「おいしそうに食べる子だねえ」（緊張して食べられなくてもおかしくないだろうに）とあんぐり顔でみつめられたことがあった。私の「美味しい記憶」の一つである。

夫の祖母にも言われた「おいしそうに食べるね」は、私が幼いころから両親を中心によく浴びてきた言葉だった。それを口にする父の顔が好きだったのか、それを聞いている母の満足気な顔が好きだったのか、恐らく両方、その家族の食事の時間が、幸せの記憶というものなのだろう。家庭の外でも、同じように言われることがあるたびに、私は少し誇らしくなり、パクパクモグモグと食べたものだ。

「美味しそうに食べる」ことは、どうも一緒に食事する人に、大なり小なりなんらかの影響があるようだ。そういうことに、じんわりと気がつくようになってきていた。

私が小学校教師であった頃、この「おいしそうに食べる」習性は、十分にその力を発揮できなかった。なぜなら多くの先生は、給食は早食い同然、もしくはいつ食べたのかわからないぐらい、仕事や雑務に追われているのだ。また、児童に「おいしそうに給食を食べる姿を見せる」よりは、「可能な限りよりよく給食を食べさせる」ことに重点がおかれていたように思う。つまり、児童はまんべんなくなんでも食べられて、マナーを守って、限られた時間内で完食を目指すというスタイルだ。もちろん、その範囲で「みんなで楽しく食べる」「おいしいね」と言い合いながら食べる、そういう瞬間はあったし、集団生活、を経験する課程では必要な時間でもあるだろう。ただ、教師が一緒になって「おいしそうに食べる」という姿は、私の他県での現職経験の記憶ではほぼ皆無といってもよかった。おいしく給食を味わっていると、子どもに不思議そうに見つめられるし、時間がきても食べきれないでいると、食の細い女子には仲間意識で喜ばれても、まず教師としての威厳は薄れる。私の「おいしそうに食べる」という個性は、自分の家庭でその力を試せばいいのではないか。わが子を授かり、母になって教師職を離れ、そういう想いに行き着いた。学校教育上の「食育」ではなく、家庭のなかでの「食事」を大切に考えることが、私の「食育」道の始まりだと。

今私は一人の子の母として、美味しいものをおいしいねと言い合い食事を共にすること「おいしそうに食べる姿」を見せ合うことを、生活のなかで大切にしている。授乳期、離乳期と息子の育ちを考えてきて、身体は食べたものでできているという確かな実感があり、食育の重要さも子育ては教えてくれる。

複雑な現代社会、いかにして生き抜くかを考えさせられることは多い。困難さを乗り越える力の源には「おいしさの共有」が必要だ。それは一人では不可能だし、誰かと一緒にあっても苦痛が伴えば逆効果だ。料理と同じで、温度が大事なのだ。あたたかい食卓が笑顔をつくる、そう信じて今宵も手を合わせたい。